

『古代飛鳥の都市構造』

相原 嘉之 (明日香村教育委員会)

研究の目的

「文物の儀、是に備れり」(大宝元年(701)正月条)と『続日本紀』に高らかに謳われている。これは我が国の律令制度がソフト・ハード共に完成したことを国内外に宣言したことを意味する。「日本国」が誕生した瞬間である。

この律令国家が確立するまでには、実に飛鳥時代約100年間の時間が必要であった。その中で、時の為政者である「天皇」はどのような政治判断をし、どのような理念のもとに国家形成を行っていたのであろうか。当時の国家形成の思想を考古学的に解明する手法として、古代王宮・王都の研究がある。その構造や規模、成立過程を解明することは、天皇が国家形成にどのように取り組んできたのかを探る方法でもある。ここでは、我が国における国家の成立を、飛鳥の王宮・王都から解明することを目的とする。

第I部 7世紀における宮都の成立過程の研究

飛鳥、近江、藤原京が7世紀の王都となった過程を考古学の手法を通じて論じた。

第1章「倭京の実像—飛鳥地域における京の成立過程—」では、飛鳥地域における時期ごとの遺跡の分布から、飛鳥の開発の動向と画期を分析した。7世紀初頭に飛鳥寺周辺における集落の集中、寺院の創設、前方後円墳の消滅、官道の設置、金属器指向の土器の出現などの最初の画期があり、つづいて7世紀中頃には集落の拡大とともに、北を意識した建物の出現、官道の整備、終末期古墳の出現、文献による「京」の初出などの過渡期を経て、7世紀後半には「新城」方形街区の設定、都城と官寺、律令的土器様式が成立して完成期に至ることを明らかにした。

これらの動向から、「倭京」と呼ばれる王都の形成は、一度になったものではなく、幾つかの画期を経て、段階的に形成されたことがわかる。さらに従来「藤原京」の造営と考えられていた飛鳥北方の方形街区も、当初は飛鳥の新市街地としての方形街区の段階と、これを拡大再整備した「藤原京」の2段階の造営があった可能性を指摘した。

第2章「近江京域論の再検討—7世紀における近江南部地域の諸相—」でも、前章と同手法を用いて、近江南部地域の遺跡の動向を分析した。南湖西部地域は、7世紀後半までは渡来系集落が多く展開していた地域であり、同様に渡来系の古墳も分布していたが、近江遷都に伴って、これらの渡来系建物は撤去させられる。しかし、現実には大津宮中枢部以外の京域については、どこまで宅地化が実現していたかは明確ではない。また、寺院についても、それまでの渡来系寺院が近江遷都により、川原寺式軒瓦を使用したり、南北方位に建て替えたりと大きな変化が起こる。この地域では、正方位地割が7世紀中頃以降に一部で形成されるが、これは方格地割と呼べるものではなく、古西近江路を基軸に、直交・平行する区画を一部に構成していたにすぎないことを明らかにした。

近江京はその存続期間が極めて短いことから、その王都としての充実度までは明確に

はできないが、古道を基準とした規格的な地割が一部で見られるなど、次の方形街区形成への布石となってることを指摘した。

第3章「新益京造営試論―藤原宮・京の造営過程―」では、「藤原京」の造営過程を、考古資料と文献史料との整合性を図ったものである。新城の造営は史料から天武5年(676)に始まることが記されるが、発掘成果からも、方形街区が形成されることが判明する。藤原宮の造営は天武11年(682)頃からはじまり、京城も、宮の造営計画と共に、東西北へと拡大整備がはじまり、十条十坊の都城計画が動き出した。いずれも天武天皇の都城造営政策の一環である。しかし、これも天武天皇崩御によって中断し、再開されるのは持統4年(690)からである。発掘成果からは、大極殿や朝堂院の建築もこの頃から始まるが、遷都当時にはまだ完成していない。朝堂院が完成するのは大宝3年(703)以降である。官衙についても前期官衙は、大宝元年(701)を境に改作が行われる。京城の拡大整備もこの頃には本格化をしている。そして、和銅元年(708)に遷都の議が図られ、これ以降、藤原京の造営は終息し、平城京造営へと動き出すことを明らかにした。

このように藤原京の造営過程には紆余曲折があることがこれまでも指摘されていたが、文献と考古資料の整合性を図ることにより、その造営過程が詳細に判明した。従来の研究が藤原京遷都(694年)までを対象としていたが、今回の検討により、708年頃まで続くことが判明し、この頃までを対象とした研究が必要であることを指摘した。

第Ⅱ部 古代王宮の位置と構造の研究

7世紀の王宮の変遷や構造、官衙の成立について、文献史料と考古資料を通じて論じた。

第1章「飛鳥の諸宮とその展開―史料からみる王宮造営の画期―」では、史料にみえる7世紀の王宮の造営期間と体制について検討した。7世紀の王宮の造営開始と完成は、史料で明らかにできる例は少ない。よって、歴史的な背景を考慮しながらも、即位時を造営開始、遷宮時を完成とみる。ただし王宮は、藤原宮・平城宮の事例をみるまでもなく、遷都時に大極殿・朝堂院などはまだ完成していない。しかし、遷都が行われていることから、天皇の居住空間である内裏は居住できるまでには完成していたものと考えられる。7世紀代の王宮は、基本的に内郭(内裏)のみで構成されていることが多く、造営期間は、内郭の完成とみる。これらを踏まえて、王宮造営の第一の画期としては東アジアを意識した正方位の王宮である小墾田宮造営があり、次には、広く仕丁を全国から求めた百濟宮の造営がある。そして難波の新政権が改革を目指し、朝堂院・官衙を付属させた難波長柄豊碕宮があり、最後の画期としては、条坊制を伴う王都と一体となった藤原宮の成立であることを明らかにした。

これらは史料を基に、造営期間と造営体制について検討したものであるが、飛鳥時代の王宮(当初は内郭のみ)造営には1年程度かかることが指摘でき、その中でも難波長柄豊碕宮と藤原宮は突出して造営期間が長い。これは遺跡からみた王宮構造・規模とも対応するもので、難波長柄豊碕宮(前期難波宮)に大きな画期があったことが改めて指摘できる。

第2章「宮中枢部の成立過程—内裏・大極殿・朝堂院の成立—」では、考古学的に確認されている王宮中樞施設群の構造変化を明らかにすることにより、王宮造営に込められた天皇の政治理念を解明した。従来注目されていた「大極殿」の成立だけでなく、内裏・大極殿・朝堂院についても、諸説を整理した結果、どのポイントに注目するかによって、成立時期の見解が分かれることを提示した。特に、「大極殿」の成立については、王宮の正殿、朝堂院の正殿、「大極殿」の名称、正殿の独立性など、どの要素を強調するかによって、研究者の見解が異なる。また、朝堂院についても、本来は儀式を行う「庭」と、衆議・政治を行う「朝堂」は別の系統のもので、それぞれが独立して展開していた。そして、この二つが統合されたものが「朝堂院」とみられる。

このような変遷といくつかの画期を経て成立するが、いずれも確実な成立は、藤原宮に求められることを指摘したが、その過程においては、特に前期難波宮にみられる大いなる飛躍と飛鳥宮跡Ⅲ期にみられる後退など、一律に発展していくわけではないことも明らかにした。

第3章「飛鳥浄御原宮の宮城—官衙配置の構造とその展開—」では、王宮に付随している官衙について検討し、その成立過程や性格を藤原宮との比較において解明した。飛鳥浄御原宮では、宮内外で官衙遺構が断片的に確認されている。これらの官衙遺構を整理し、その官衙を掌握する機構についても推定した。内郭に近い宮内には、宮内官、後の中務省に属する官衙が配置され、宮外にはその他の官衙があったと推定された。

これは官衙の成立過程を示す点において極めて重要である。王宮は本来、天皇の居住空間であり、そこに公の政治・儀式などを行う空間が誕生、さらにこれらの実務を行う官衙が内郭周辺に造られるのである。特に、内郭（内裏）に近い宮内に、天皇に関わる官司（官衙）が営まれ、宮外には、その他の官衙が必要に応じて設置されていく過程を示している。これらの官衙は、次の藤原宮においては基本的に宮城内に集約されることになる。天皇の居住空間である「内裏」、政治・儀式の空間である「大極殿」「朝堂院」、実務機能をもつ「官衙」が大垣の内側に配置されるのである。さらにここでも、内裏に近い場所に天皇に関わる官衙（宮内省・中務省）がみられることや、建物配置などからもコンパクトにまとまった官衙と長大な建物を並列する官衙の2パターンに分類でき、それは飛鳥宮においても、すでにその傾向を窺うことができる。このように、官衙配置の変遷と展開を解明することにより、王権の政治システムの充実度とその過程を理解する上で重要である点を指摘した。

第Ⅲ部 飛鳥地域における都市構造の研究

7世紀の王都の構造について、宅地・道路・庭園、そして防御施設という4つの視点から、飛鳥地域の都市構造を復元し、国家形成過程における王都のあり方を論じた。

第1章「宅地空間の利用形態—掘立柱建物の統計的分析を通して—」では、飛鳥地域の宅地について検討した。飛鳥地域でも宅地遺構と推定される掘立柱建物が断片的に発掘されている。しかし、それは建物が数棟あるいは建物の一部であることが多く、敷地規模や建物配置が解明される事例は少ない。そこで建物そのものがもつ属性（規模・構造、柱間寸法・柱穴規模など）を統計的に処理し、これを藤原京の建物における属性

との比較において分析した。

飛鳥地域の宅地は4ランクに区分が可能であるが、飛鳥の盆地内には、王宮・官衙・寺院しか存在しない。その周辺に宅地が配置されているが、大局的には近隣の丘陵部に高位の宅地、離れるほど下位の宅地となる。ただし、従前からの本願地とも関連して、皇族や豪族の宅地は丘陵部の立地のよい場所に位置する。さらに「新城」方形街区に伴う宅地（藤原遷都以前）には、後に藤原宮を造営する場所を中心とした宅地の序列はみられず、この段階の王宮は飛鳥浄御原宮である。この方形街区は区画としての機能でしかなく、階位を表現する宅地班給ではない。天武朝の難波京の記事ではあるが、『日本書紀』天武紀12年条の「各往りて家地を請はれ」の内容との関係を強く示唆していることを指摘した。

第2章「飛鳥地域の道路体系の復元—都市景観復元に向けての一試論—」では都市の重要な構成要素である道路について、考古資料を基に飛鳥地域の道路を復元した。7世紀後半の飛鳥の道路網について、北方の山田道からは、飛鳥寺の西から南に回り込み、飛鳥宮の東辺を南下して、王宮に入ったと推定される。しかし、これらは既存施設、特に飛鳥で最初に建てられた飛鳥寺を迂回しながら王宮に至るルートであり、王都としての計画性はみられない。これを解消するために、下ッ道から幅12mの直線東西道路、仮称「飛鳥横大路」を敷設することにより、幹線道路から王宮へのメインストリートが設置される。

飛鳥地域では、既存施設を迂回したり、道路に面した施設を建てたりしていた。それが都市の充実と拡大する中で、直線道路などを付加することが飛鳥の道路網の特徴である。これに対して次の藤原京になると、条坊と呼ばれる区画道路へと変化しており、質的にも、景観的にも異なる新しい都市景観が形成されたことを指摘した。

第3章「飛鳥の古代庭園—苑池空間の構造と性格—」では、近年、調査研究の進んでいる飛鳥の庭園について、遺構に即した分類を行い、その主たる性格を特定した。しかし、発掘調査で庭園遺構として確認されるのは、大地を掘り込んだ池跡しかなく、地上に突出する築山や、空閑地である広場については、削平あるいは認識されないことが多い。そこで池跡の構造を中心に区分した。

7世紀の庭園遺構（池）は大きく方形池と曲池に大別される。さらに方形池は規模や深さ、護岸などの構造から、服属儀礼に伴う池、水を貯める貯水池、仏教思想に基づく蓮池に細分され、その構造によって、庭園（池）の性格も異なることが判明した。一方、曲池は懸樋で水を落とす施設と、曲線を多用した護岸をもち、水深が浅く、中島をもつものに二分される。前者は当初、祭祀色の強い施設から導水構造へと変化をしていく。一方の后者は、奈良時代以降の庭園へとつながる原型となるもので、前者の施設が后者の池への導水となっていくことを明らかにした。

このように飛鳥時代の庭園にも多様性があり、一系統ではありえない。特に、祭祀的な要素が強いものから弱いものへと変遷し、庭園における遊園施設となっていく。これが、その後の奈良時代以降の池へと繋がっていくことを指摘した。

第4章「倭京の守り—飛鳥地域における防衛システム構想—」では、飛鳥の東方丘陵上で確認された掘立柱塀の性格を検討した。尾根そのものを基壇とみためた掘立柱塀

が稜線上に続いている。その設置範囲を復元すると、飛鳥の盆地部を囲むように復元でき、飛鳥を囲む「羅城」的な施設ではないかと推定した。さらに森カシ谷遺跡など丘陵上にある特異な遺跡や、飛鳥周辺に点在する「ヒブリ山」地名などを検討した結果、狼煙台や官道を監視する施設の可能性があることを指摘した。また、律令国家の軍事組織・体制を整理し、中国の組織と対比した。さらに7世紀代の国内外における軍事的緊張時期の検討を踏まえて、これらの遺跡が設置される背景についても検討し、白村江前後において、極度に国際的な緊張があり、この時期を中心として、飛鳥を守る必然性を明らかにした。

これらを総合的にみると、我が国の国防システムは、①北部九州から瀬戸内にかけての山城・軍団の防衛システム、②生駒・葛城山系とそこから飛鳥への烽等の監視システム、③飛鳥中心部の羅城・寺院・河川（運河）という三重構造になっていることが判明し、飛鳥中心部にある王宮とその関連施設（官衙）を防衛することを意図していたことを明らかにした。ただし、「羅城」的施設は、飛鳥の都市域を囲む施設ではなく、王宮と官衙などの公共施設群を守る施設とみられ、都市を囲む「羅城」とは性格を異にする。むしろ、次の藤原宮の宮城を守る宮城垣へと繋がる系譜と推定される。

結．我が国における古代国家の形成過程

－古代宮都の変遷からみた律令国家の形成－

これまでの検討を踏まえ、古代宮都からみた律令国家の形成過程を総括し、国家形成の過程を概観した。飛鳥時代の王宮・王都の変遷は単純なものではない。そこには大いなる飛躍や後退を繰り返しながらも、発展をとげていったのである。その背景には、国際的な関係や国内的な事情が、時の政権に影響とインパクトを与えて、王宮の構造・規模の変化に繋がっている。同様に制度の充実や確立に伴い、官衙域の発展を促し、宮城内への公施設の集約になる。これらは王都の発展においてもみられ、徐々に拡大しながら、さらに規格性をもったものへ変化し、方形街区の形成を経て、最終的には、新益京の都城となって結実する。これら王宮・王都の解明が、律令国家の形成過程を鮮明に表すもので、宮都研究は国家形成の鏡であることは間違いない。